

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管 25K02	氏 名	井上 英記
研究主題 —副主題—	子供理解を中心とした授業研究の在り方 ～教師と子供がともに成長するために～		
所属校	多摩市立東落合小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>今の教育現場では授業研究が盛んに行われ、ほとんどの学校で校内研究会が毎月設定され実施されている。年度当初に出される年間行事予定表に明記され、教育計画にも位置付けられている。しかし、設定された形の校内研究に対して教師が受け身になりがちで、自分の経験の中では、主体的な研究になっていかない状況もあると感じてきた。</p> <p>校内研究には、教育の現場から離れずに研究に取り組める、いろいろな職層や年齢層の教師が共に学べる、児童の実態を共通理解できる、といった利点がたくさんある。学ぶ意欲があっても機会が少ない、校外に出て学ぶのは大変、といった研修に対する課題がある教育現場では、校内研究は大きな意味をもっている。また、校内研究が活性化し、より質の高いものへと発展させていくことができれば、授業の質の向上として学校の子供たちにも還元することができ、子供たちへ大きな教育効果を生み出すことができる。さらに、教師同士の同僚性にも良い影響を与え、学校運営の面からも大きな効果を期待することができる。</p>
II 研究の方法	<p>(1) 研究の内容</p> <p>本研究では、教師にとって「自らが学び成長している」という意味や意義を十分に感じることができる校内研究であれば、教師自身に研究に対する内発的動機付けがされると考えた。では、どうしたら教師にとって「自らが成長している」という意味や意義を十分に感じることができるのか、どうしたら教師にとって活力のある研究にしていけるのか、という点について考察した。</p> <p>(2) 研究の方法</p> <p>①勤務校における教師に対する意識調査（対話によるアンケート）を行う。 勤務校の研究部会での参与観察と協議会の録音を行い、逐語記録を起こす。</p> <p>②勤務校の対話による意識調査の分析及び協議会記録の逐語記録の分析からその特色を明らかにする。</p> <p>③富山市立堀川小学校の現職研究に参与観察し、その記録の分析を行い、特色を明らかにする。</p> <p>④堀川小学校から学んだことから勤務校の校内研究に生かせることを提案する。</p>
III 研究の結果	<p>(1) 勤務校の校内研究</p> <p>勤務校の教師の意識調査を行い、考察・分析を行った。その結果、全ての教師は皆立場を超えてやりがいのある研究をそれぞれの立場で何らかの形で願っていることが分かった。さらに、今までの研究でも成果が出ていたと感じている管理職と、今の研究では物足りないと感じ、今よりもっとよい研究へとしていきたいと考えている教師という二つの群があった。しかし、どちらの思いも研究をより良い研究にしたいという共通の思いがあった。</p>

	<p>今の研究のままではよくないと感じている教師に見られる傾向として、よい研究をしたいという思いをもってはいるが自分ではどうしたらよい研究へと転化させることができるのかという見通しがもてていないことが分かった。そのため、うまく研究が深まっていけないことを他のせいにして、主体的な見通しをもてないために研究に対して受け身になりがちな姿勢から抜け出すことができなくなっていた。これらを改善するために、まず教師一人一人が研究に対して見通しをもち、それを共有することが大切だと考えた。そこで、筆者は勤務校の校内研究を変えていくポイントは「研究に対して自分なりの考えをもち見通しをもつ。」、「課題意識を学校全体で共有し深め合う。」の二つだと捉えた。</p> <p>(2) 富山市立堀川小学校の研究</p> <p>富山市立堀川小学校では児童の詳細な記録を起し、それを基に授業構想を練り、部会や協議会では児童の詳細な記録に基づいて考察する方法をとっている。単元開始後のそれまでの子供たちの学びの逐語記録を起し、それらを根拠にしながら提案を行っている。この堀川小の校内研究について考察し、勤務校の校内研究の活性化のヒントとすることにした。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>(1) 2つの学校（勤務校・堀川小学校）の研究協議会記録の分析と考察</p> <p>堀川小学校の協議会では記録を基に協議を行うことで参加者全員が発言しやすい場になっている。そのため、印象や受け止め方の違いは議論にならず、子供の思考をどう読み解くのかについて本質的な議論になっている。それぞれの協議会で子供の活動について言及しているが、勤務校での協議会では子ども活動の記録をもとにして協議していないので、印象や記憶にたよっての協議になり、具体的な子供の活動を捉えることにまで至っていない。</p> <p>(2) 授業研究の視点</p> <p>授業研究の方法には大きく二つの捉え方があると考えた。一つ目は、教師の指導技術論に特化した研究である。授業の内容や目的を明確にし、どのような教材・教具を用いて、どんな方法で子供たちに学びを提供するか、という教師側にたった研究である。もう1つは、子供が学びにどう向き合っているか、どう考えどう取り組んでいるかを見取り、学びに生かしていくという、子供側に立った研究である。一般的な授業研究では前者の立場に立ったものが多く行われている。</p> <p>(3) 提案</p> <p>子供の事実（活動）をもとに考察し、子供理解を中心とした協議にするために、子どもの活動の記録をおこす。子供の活動を記録におこすことで、参観しているだけでは気付かなかったことにも気付くことができる。さらに、文字化することで協議に参加している人全員が子供の活動を共有することができ、同じ土台の上で協議を進めることができる。記録があるからこそ、子供一人一人を見つめ直すことができ、教師の活動や言葉にも着目することができる。また、記録を読み解くことで子供の思考の流れも確認することにもつながっていく。</p>